

# 会報

2009.10.20

第55号

## 戦没船を記録する会

〒123-0864 東京都足立区鹿浜2-20-8

篠原国雄方

Tel・FAX:03-3897-6259 郵便振替001606-719515

URL:www.ric.hi-ho.ne.jp/senbotusen/

E-mail: senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

## 組合と共同でDVD作製

### 作製委員会を立ち上げて着手

戦没船を記録する会第17回定期総会の決定に基づいて本会は、川島会長ら代表が6月3日、全日本海員組合を訪れ、藤沢組合長に「DVD作製に関する要望書」を手渡し、今日までの取り組みとその趣旨を説明、資料を提出して協力を要請した。

藤沢組合長は「願ってもない良い企画なのでぜひ実現したい。内容は戦没船を記録する会にお願いして、組合は技術面、資金面を全面的に引き受ける。組合もプロジェクトチームを作って取り組みたい」との意思を表明した。

これに基づいて本会は、6月21日に第17年度第一回理事会を開催し、DVD製作に関する対策を協議し、対策委員会の人選を行った。また、海員組合も田中中央執行委員以下の対策委員会を選任、8月30日に第一回の会合を開き「DVD作成委員会」を正式な名称とすることなど、基本的な取り組みについて確認した。(組合との関連事項は別項参照) こうして戦没船・戦没船員DVD作製が本格的に始まることになった。

本会の今年の定期総会(本年4月23日、東京浜松町海員会館で開催)の活動方針の審議では、従来から継続している①戦没船・戦没船員に関する調査、資料・記録の収集、②本会独自の展示会開催、各地のパネル展への参加、③必要なパネル等の作成、パネル展等への資料の貸し出し、④会報の発行など本会の基幹的な活動については、継続して取り組むこととなった。

DVD作製については、本会が今までに蓄積した資料や記録を後世に残したいということから出発しているが、資料や記録を並べただけでは見て貰えな

## 目次

|                  |   |
|------------------|---|
| 組合と共同でDVD作成      | 1 |
| DVD作製への経過と現状     |   |
| DVD作成について[確認事項]  | 2 |
| 第16年度活動報告        |   |
| 同 決算報告           | 3 |
| 2010平和のための埼玉の戦争展 |   |
| 過去の惨禍を尋ね海の平和に生かす | 4 |
| ソマリア海賊問題その後      | 5 |
| 歴史に埋もれた船に魅かれ     |   |
| 戦時木造船調査にも取り組む    | 6 |

い。また、船舶や船員が遭遇した過酷な状況や重大な被害(例えばガダルカナルやレイテの強行輸送作戦、トラックやマニラ・沖縄大空襲等々)を並べただけでは正しく理解して貰えないし、全体像は見えてこない。等々、この定期総会までの一年間に6回の理事会・運営委員会で論議が関わされたが、その結果、太平洋戦争の経過に沿って、船舶や船員がどのような経過をたどったかを明らかにして、物語を進めるようにすることとした。

基本的には本年3月の検討委員会(理事会)に提案された新関理事の「DVD作成案」に基づいて作業を進めるが、本会だけでDVDを造るのは困難であるので、海員組合に要請して共同で制作することとする。更に、専門家や業者に依頼して製作するとすると、本会としては、作製の趣旨と筋道、所有する資料やデータなどを明確にして海員組合に申し入れを行い、本会と海員組合が、業者・専門家を交えて協議する体制を造り、作業を進める方法がより合理的であると考えられる。

また、DVD作成は最低でも2年(原案作製に1年、映像作製に1年)以上かかると思われるので、総会で決定されたら、早急に海員組合に申し入れを行うよう決定されたものである。

### 第2回理事会開催告示

戦没船を記録する会 会長 川島裕

本会の第17年度第2回理事会を下記により開催致します。

記

日時 2010年11月18日14時より

場所 東京海員会館(東京都中央区晴海3-7-1)

☎03-3531-2236

議題 DVD作製について

当面の活動について その他

## DVD 作製への経過と現状

DVD 作製について定期総会で、海員組合に協力を要請し、共同して取り組む事が決定され、その話合いのために吉田副会長、上村理事、篠原事務局長が選任された。組合総務部と打ち合わせを行い、5月17日に本会の3人と組合側の田中中執、鈴木総務部長、鈴木総務部副部長補が出席して、組合と本会との正式会合のための話し合いを行った。

### 全日本海員組合に協力を要請

この時本会は、組合長宛の要請文と添付資料として、DVD 作製方針の要旨＝活動方針や基本構想(新聞案)、DVD-ROM集積リスト、アルフォト・展示パネル・写真パネルその他、本会所有の資料リストを提示し、趣旨と資料の説明を行った。

その結果、6月3日に正式な会合が持たれた。組合からは藤澤組合長、大内副組合長と田中中執、鈴木部長が、本会からは川島会長と吉田・上村・篠原の3委員、ホームページやIT資料管理の栗原理事が出席。川島会長が事業の趣旨を説明、組合の協力を要請し、事務局長らが資料の説明を行った。

組合長は、願ってもない良い企画なので是非実現させたい。内容について組合に能力はないので戦没船を記録する会にお願いして、組合は技術面や資金について全面的に引き受ける旨の意志表明をした。

この会合の結果を受けて本会は、6月21日理事会を開催して、DVD作製についての本会の取り組み体制として理事会が対応すること。また、この作業に直接かかわる対策委員として、連絡責任者篠原事務局長、委員として栗原、河内山、竹中、新聞の各理事を、補助委員として吉田副会長、伊東理事を、DVD作製委員会委員として選出した。

### DVD作製委員会の発足

8月30日に初めてのDVD作製委員会が海員組合ビルで開催され、本会からは篠原、栗原、河内山、新聞、吉田の5委員が出席した。組合からは責任者として田中中執、鈴木部長、鈴木副部長補、官川広報室長、大保広報部室長代理らが出席、鈴木部長の司会で、田中中執から初めてのDVD作製委員会開催についての挨拶があり、出席者の紹介が行われた。

続いて、戦没船を記録する会が一昨年来DVD作製の検討を続け、独自での作製は困難なため海員組合に協力を要請し、今日の委員会開催に至った経過を篠原事務局長が報告した。

また、この委員会の目的や役割分担等について別項

の通り確認がなされた。

本題に入り、新聞委員が全体の構想について説明を行い、また、本会の蒐集し所有する資料やデータについて、栗原委員からプロジェクターを使って説明が行われた。更に、組合側からは、映像製作会社の選定についての調査結果の詳細な報告が行われたが、シナリオ等準備不足のためそれ以上の進展はなかった。次回開催は海員組合の定期全国大会後の11月30日。

## DVD 作製について [確認事項]

### 1、事業の目的・内容

太平洋戦争における戦没船・戦没船員に関するあらゆる記録をDVDに作製する。

全日本海員組合と戦没船を記録する会が共同して作製する。

### 2、日程

二年程度の日程で作業を進める

第一年度は事業内容・作製する体制などを整備し、作業に取り掛かる事とする。第一年度は概ね、DVDの筋書きの確定、原稿・シナリオの執筆、整理・完成させる。収録資料の選択・整理・入力を完成させる。

必要な段階で専門家、業者の参加を求めて作業を進める。

第二年度はこれ等の記録・資料を組み合わせ・組み立て、取捨選択してDVDの仕上げ作業を行う。

### 3、作業分担

戦没船を記録する会は、DVDの内容となる記述、記録、資料、図表、写真その他の、会が所有する素材をこの事業の為に提供する(戦没した船と海員の資料館に展示・所蔵の資料を含む)。

全日本海員組合は、必要な資料を提供すると共に、主としてDVD作製の技術的な分野を担当する。

### 4、費用の支出

DVD作製の費用は海員組合が負担する。但し、作製委員の旅費交通費等は含まない。

### 5 DVD 作製委員会

この会議は、全日本海員組合と戦没船を記録する会が、夫々指名した委員によって構成する。

委員の交替は、その都度会議に報告する。

この会議は概ね3カ月毎に開催し、この事業の全ての問題について協議、決定する。

定例会議のほか、必要に応じて、必要な人員で連絡会議を開催する事が出来る。

連絡責任者 全日本海員組合 鈴木総務部長

戦没船を記録する会 篠原事務局長

## 第16年度活動報告

### 組織の現状

本会の今年度の会費収入は30名から151,000円で、寄付金は11,000でした。現在個人宛に発送している会報は102通で、最近では会報発送の度に家族から会員の高齢化や死亡による発送中止の要請が届いています。会員の平均年齢はおそらく80歳を超えており、新規に若い会員が加入しないならば、組織の維持は困難であります。

### パネル展等

本会が従来から取り組んできた他の団体との共催のパネル展は、「平和のための戦争展 in よこはま」かながわ県民センター、「2009 平和のための埼玉の戦争展」浦和コルソ、他静岡、焼津などでも同様のパネル展が開催され、参加しました。また、松山市で開催された全日本海員組合定期全国大会でも戦没船パネル展を開催しました。

さらに前年度、島根県浜田で本会貸し出しのパネル展に続いて、徳島県平和委員会からも同様の要請があり、30点余のパネルを貸し出し、県内を約3カ月間巡回するパネル展として実現しました。

### 会報の発行

今年度は第53号09年10月、第54号10年3月の2回の発行にとどまりました。年4回発行、定時発行のためには、事務局体制、編集発行体制の改革が必要であります。

### DVD作成について

この問題は前年度から論議にのぼり、第16回定期総会で取り組みを決定して以来、6月、8月、10月、今年1月、3月の理事会兼運営委員会で討議を重ねてきました。

この計画は、本会が今まで蓄積してきた各種資料を後世に残したい、ということから出発したもので、資料を見るだけならホームページで見られる、DVDにしても資料を並べただけでは積極的に見て貰えない、ということからDVD作成となったものです。

当初3回の論議は自由討議で纏まりがつかないことから、素案を造る者を指名し1月の会議に4案が提出され説明されました。しかしこの中から一つの案を導き出すことも不可能なことから、これを纏めるための委員が指名され、3氏の協議の結果を新聞委員がまとめて、三月の会議に提案・説明され、それが大会方針となったものです。(1・2面参照)

## 戦没船を記録する会 収支報告書

2009年4月1日～2010年3月31日

### 基本会計

| 科目     | 目     | 収入      | 支出 | 合計      |
|--------|-------|---------|----|---------|
| 前年より繰越 | 入会金の他 | 152,000 |    | 152,000 |
| 合計     |       | 152,000 |    | 152,000 |

### 一般会計

| 科目     | 目      | 収入      | 支出      | 合計      |
|--------|--------|---------|---------|---------|
| 前年より繰越 | 会費     | 531,458 |         | 531,458 |
|        | 助会費    | 151,000 |         | 151,000 |
|        | 寄付金    | 11,000  |         | 11,000  |
|        | 事業収入   | 5,000   |         | 5,000   |
|        | 雑収入    | 1,826   |         | 1,826   |
| 収入合計   |        | 700,284 |         | 700,284 |
|        | 通信費    |         | 59,832  | 59,832  |
|        | 会議費    |         | 37,400  | 37,400  |
|        | 印刷費    |         | 13,300  | 13,300  |
|        | 事業費    |         | 58,920  | 58,920  |
|        | 旅費交通費  |         | 20,510  | 20,510  |
|        | 消耗品・雑費 |         | 67,467  | 67,467  |
| 支出合計   |        |         | 257,429 | 257,429 |
| 次年度に繰越 |        |         |         | 442,855 |
| 繰越金内訳  |        |         |         | 700,284 |

| 基本会計    | 金額      | 一般会計 | 金額      |
|---------|---------|------|---------|
| 現金      |         | 現金   | 23,791  |
| 振替貯金    | 2,000   | 振替貯金 | 381,115 |
| 銀行預金(労) | 150,000 | 銀行預金 | 17,140  |
| 合計      | 152,000 | 郵便貯金 | 20,809  |
|         |         | 合計   | 442,855 |

### 会計監査

2010年4月20日

小島 久子  
桑島 直矢

### 特別資金会計報告

2009年度 2010年3月末現在

| 科目    | 金額        |
|-------|-----------|
| 前年度繰越 | 1,070,051 |
| 資料収集費 |           |
| 機材整備費 | 5,930     |
| 資料作成費 |           |
| 展示会費  | 39,738    |
| 旅費交通費 | 80,960    |
| 協力交通費 | 146,220   |
| 通信費   | 2,830     |
| 文具費   | 10,578    |
| 事務所費  |           |
| 雑費    | 600       |
| 支出合計  | 286,906   |
| 次年度繰越 | 783,145   |
| 合計    | 1,070,051 |
| 繰越金内訳 |           |
| 現金    | 83,145    |
| 銀行預金  | 700,000   |
| 合計    | 783,145   |

## 2010平和のための埼玉の戦争展 過去の惨禍を尋ねて 海の平和に生かす

「2010平和のための埼玉の戦争展」は、7月29日から8月2日までの5日間、JR浦和駅前コルソで開催されたが、15,000人の参観者があり、近年では最多を記録した。

今年は、戦後65年、被爆65年等、様々な歴史の節目となり、核兵器廃止運動や平和運動も新たな進展を見せつつある中で、埼玉の戦争展全体も「戦争はいらない、子どもたちに愛と平和を」をメインスローガンに、次のコーナーを設け、創意工夫を凝らしたパネルを展示すると共に解説が行われた。

- 戦前・戦中の教育と子どもたち
- 日本と朝鮮半島一過去・現在・未来
- 満蒙開拓団を送り出した村は・・・
- 日本はアジア各地で・・・加害の実相
- すみやかな戦後処理を
- 核兵器のない世界をめざして
- 平和へと向かう世界の流れ
- 「地球規模の日米同盟」を考える
- 再び戦争と暗黒の時代を許さない
- 憲法を生かし、平和な日本・世界を

### 本会の展示パネル

DVD製作が具体化しつつある中でパネル展示への注力が減少したが、戦没船・戦没船員全般に加え昨年展示の「ソマリア海賊問題」が継続しており、同問題のその後の動きとそこから見えてきたものに触れ、次のパネルを展示した。

#### <戦没船・戦没船員関係>

- 1、海の平和を願って(別掲)
- 2、本籍地・所属別戦没船員数表
- 3、太平洋戦争中の日本船舶および艦船沈没位置図
- 5、太平洋戦争による海域別戦没船数図
- 6、大久保画伯絵—8枚
- 7、攻撃される日本船舶(米軍写真)—6枚

#### <ソマリア海賊関係>

- 1、日本を中心とする海上物流ルート図
- 2、ソマリア海賊問題その後(2009.1月以降)
- 3、ソマリア海賊事案発生地点図
- 4、ソマリア海賊事案発生件数の推移グラフ・表
- 5、日本関係船のアデン湾通航延隻数表
- 6、アデン湾における自衛艦の護衛隻数
- 7、ITFポリシー・ステートメント

### 海の平和を願って

「海のほかにその墓をもたず」。アジア、太平洋の広い海域で戦没した船員は6万余名、戦没した船舶は1万5千余隻と記録されています。船と運命を共にした船員と、多数の将兵や民間人便乗者は、今もその海底に眠っています。

太平洋戦争で日本の船舶と船員は陸・海軍に徴用され、北はアリューシャンから南はソロモン諸島やインドネシア、東はマーシャル諸島、西はビルマに至る広大な海域で、軍事作戦輸送や補給物資輸送、現地から日本への貨物輸送などに従事しました。しかしこの間の広大な海域への増援や物資補給の航海は、特別の作戦を除いて海軍の護衛がなかったため、敵潜水艦や飛行機の攻撃を受け、多くの船舶や船員、将兵・便乗者と積荷が海の藻屑と消えました。

日本の海軍が輸送船の甚大な被害に驚き、昭和18年11月海上護衛総司令部を足踏させた時は、日本の商船はすでに半減していました。この戦争による船舶の被害は、500総トン以上の商船2,534隻、833万総トン、船員の死亡率は、陸軍20%、海軍16%の倍以上の43%とされています。

戦後65年を迎えるに当り私たちは、戦争で海に沈んだ多くの人々の慰霊と鎮魂の思いを込めて、自らの手でこの戦争を検証し、その記録を後世に伝えようと、1994年「戦没船を記録する会」を結成し、戦没船員や戦没船に関係する記録の収集に努め、その記録・資料の展示会を全国各地で開催して来ました。そして2000年には全日本海員組合の協力により、神戸の海員組合ビルに「戦没した船と海員の資料館」を開設し、私たちの集めた1,300隻余の戦没船の写真をはじめ、多くの記録・資料を永久展示する事が出来ました。

私たちは、この資料館が海の平和のための発信基地として、多くの人々に利用されることを願っていますが、私たちもまた、再び海を戦場にしてはならないという固い決意のもとに、今後とも海の平和を守るための活動を続けていく決意であります。

### 戦没船を記録する会

#### 明らかになってきたこと

- 20カ国以上が海賊対策のため軍艦を派遣したが、ソマリア海域の海賊事件は増加し、発生海域も広がり、沈静化の見通しも立っていない。
- ソマリア国と近隣諸国によるソマリア海域の秩序確立、海賊発生の根本原因の解決の必要性が国際

的に高まってきている。

○ この1年間、日本関係船のハイジャックはなく、人身事故もなかった。

○ 2009年の日本関係船のアデン湾通航延隻数は1784隻であったが、自衛艦による護衛は、(時期と期間にずれはあるものの)260隻/15%弱に留まっており、約1500隻/85%が護衛なしで航行していることになる。

○ 船種別では、日本経済に影響するものとして、自動車専用船とコンテナ船があげられるが、何れもその護衛率は4.8%・0.5%に過ぎず、護衛なくしても殆ど影響ないことを示している。

○ 護衛率が低い原因として、海賊襲撃の危険性が少ない、護衛航行の速度が遅い、スケジュールが合わない、南アフリカ廻り航路を採っている、護衛能力不足等があげられているが、前述の被害がないことと合わせると、護衛の必要性がない、必要に迫られていないことの現れであろう。

○ 「国際貢献」の名の下に、自衛隊の海外活動が安易に拡大している。

○ 日本の対ジブチ不平等協定が批判を浴びた。



### ソマリア海賊問題その後(一部割愛)

(2009年)

3. 30、日本＝アデン湾で自衛艦が「海上警備行動」開始。
4. 2、米海軍＝セーシェル沖で海賊に襲撃されたタンカー救出、海賊母船撃沈、11人を拘束。
4. 3、日本＝ジブチとの間に「日本要員の裁判権を全面的に日本側に委ねる」との交換公文を交換。
- 5 月、国連安保理、安保理決議1872号採択。
5. 28、日本＝自衛隊がP3C哨戒機2機を拠点となるジブチに向け派遣。
6. 19、日本＝「海賊対処法」成立。
7. 17、ITF＝「ポリシー・ステートメント」発表。
7. 28、日本＝アデン湾で自衛艦が「海賊対処行動」開始。
9. 6、日本＝ソマリア海上警察力強化に供する「海賊対策基金」の設立方針を表明。
9. 8 ソマリアTFG(暫定連邦政府)＝海賊対策のため海軍の建設を開始。
9. 10、ジブチ政府＝沿岸警備隊を拡充するため日本海上保安庁に支援を要請。
- 10月、海賊事案発生件数でソマリア沖東がアデン湾を上回る。

(2010年)

1. 29、第5回「ソマリア沖海賊対策に関するコンタクト・グループ会合」開催。海賊発生の原因への対処の必要が強調された。
4. 5、日本企業運航のコンテナ船が銃撃を受け船体に被弾するも、襲撃を振切る。人身被害なし
4. 25、日本企業運航のタンカーが銃撃を受け船体に被弾するも、襲撃を振切る。人身被害なし。
- 4月下旬、日本船主協会＝政府に「ソマリア沖を航行する船舶の安全確保」を要請。
5. 13、日本ITF＝「ソマリア沖海賊撲滅署名運動」開始
6. 11、第6回「ソマリア沖海賊対策に関するコンタクト・グループ会合」開催。ソマリアTFGや沿岸国のキャパビルと連携の必要が強調された。
7. 16、日本＝アフリカ・ソマリア沖での海賊対処活動の1年間延長を閣議決定。
- 7 月、日本＝海賊対処活動の長期化に備え、ジブチに海外活動拠点(軍事基地)建設を開始。
7. 24、日本＝政府が海賊対策として、海上自衛隊の補給艦を新たに派遣する方向で検討に入る。

日本関係船のアデン湾通航延隻数と自衛艦の護衛実績

| 西暦<br>(年)           | 船種<br>自動車船<br>(隻) | コンテ<br>ナ船  | ガス・油船        |               |                           |                | 雑貨<br>船      | その<br>他 | 合 計           |                |
|---------------------|-------------------|------------|--------------|---------------|---------------------------|----------------|--------------|---------|---------------|----------------|
|                     |                   |            | バラ<br>積み船    | LN<br>G船      | ケミカ<br>ル・プロ<br>ダクト<br>タンカ | 原油<br>タン<br>カー |              |         |               | LP<br>Gタ<br>ンカ |
| 2007                | 874               | 716        | 183          | 125           | 105                       | 49             | 26           | 35      | 15            | 2,128          |
| 2008                | 849               | 707        | 172          | 105           | 154                       | 52             | 28           | 25      | 11            | 2,103          |
| 2009                | 562               | 631        | 36           | 189           | 222                       | 65             | 41           | 33      | 5             | 1,784          |
| 自衛艦護衛数<br>(対通航数比率%) | 27<br>(4.8)       | 3<br>(0.5) | 29<br>(80.6) | 182<br>(35.2) |                           |                | 17<br>(51.5) | 2       | 260<br>(14.6) |                |

注) 「日本船主協会関係船の船種別通航隻数」(日本船主協会)および「アデン湾における自衛艦の護衛実績(2009.7.28～2010.7.18)」(防衛省)を基に「戦没船を記録する会」が作表

## 歴史に埋もれた船に魅せられ

### 戦時木造船調査にも取り組む

本誌 54 号に西口公章氏の投稿を掲載したが、公務員であった氏が船や船員に関心を持つようになった経緯・心境には興味深いものがあるので、地元誌の掲載からその概要を紹介する。

西口さんの母の家系は船大工、父は元造船マンという環境で長崎に生まれ育った。

「私が幼い頃、よく母が白い帆かけ船の絵を描いてくれました。下関の近郊で育った母はよく『内務省の浜』で遊んだという話をしました。それらのなんとなく優美なイメージが私を船の世界にいざなってくれたのかもしれませんが。」

父に叱られる自分たちを涙を流しながらかばってくれた姿とともに、母の記憶には海がともなう、まさに「母」と「海」が重なり合う。

研究対象として第一に挙げたのは戦時木造船だった。戦時下の制約された状況のなかで、輸送力の増強を目指して低コストで建造されていった船一戦時標準船。木造船についての記録はほとんどない。「残しておかんば」という思いがつのり、独力で地道な調査を進めてきた。

休日を使い、資料探しに並行して、戦時木造船に関わった人たちからの聞き取り調査にも取り組んでいる。7~8年越しの交渉の結果取材に応じてくれたケースもある。戦争関連だけに当事者の口はまだ重い傾向がある。証言者の高齢化も問題だ。

二番目に挙げたのは、地方や離島を支えてきた船の歴史だ。特に長崎~五島間に関心が深い。西口さんはいつも不思議に思う。「日本には鉄道にはファンは多い、歴史ファンも多い。でもなんで船には目が向かないのかなあ、と。当然生活のなかにも船は溶け込んでいるはずなんですけれど、いかんせん記録が少ないんです」。

ならば、と使命感がさわぐ。

少しでも船のことを知ってもらおうと、地元の銀行で五島航路の写真展をしたことがある。意外とやってみると好評だった。

他の研究者や機関からの要請を受けて、所蔵する貴重な昔の船の写真やデータを貸し出したこともある。長崎を最後の寄港地としてアジアなどへ売られて行く中古船の姿を記録にとどめる活動も。

西口さんは長く裁判所の裏方として勤務してきた。

さまざまな人間模様、喜怒哀楽をいやというほど目に焼き付けてきた。解決のためにもつれた糸を一本一本解きほぐす労作業は、歴史の表舞台には出てこない無名の小船の一生を追いつける仕事と似てしまいか。

「通勤の途中、買い物の途中、海に目を向けるのが習慣になってしまいました。遠回りになっても海沿いを行くとか。見かけない船がいるとカメラを持ってすぐに。お父さんは買い物の途中ですぐいなくなる、と妻に言われることもあります(笑)。たまたま輸出先からの『出戻り』の船もいるんですよ。それだけ日本の船は頑丈で、技術力が高いと思うのです。」

若い頃は「大艦巨砲主義」それが無名の船に関心を持つように変わって行った。どの様に心境の変化があったのか。

「私も不思議なんですけど、船が好きになる前は城が好きだったんです。だけど天守閣のない石垣だけの城もある。ここに城があったというだけの場所もある。そういうあまり人に知られていないところがどうだったのかを調べることに興味が湧いてきて、やがて船にもそういう視点で臨むようになったんです。有名な船は何冊も本になっているけど、無名な船には記録すら乏しい、そこを発掘していく。醍醐味はありますよね。」

西口さんは、引かれたという「失われた兵士たち」(野呂邦暢著)を思う。

『太平洋戦争は日本民族の記憶となって後世に受け継がれてゆかねばならず、それこそがこの戦争から学んで行く一つの方法だ。』

その失われた兵士よりも多く、銃も持たず戦場で亡くなった人たちがいる。軍人より数倍、死亡率が高かった船の乗員たちである。

諫早湾の軍用造船所で急造された船の航跡を追うと、その中に「第1松浦丸」(78トン)は海軍に狩り出され、北方の千島に行く。もう1隻「第1諏訪丸」(78トン)は陸軍に徴用され、南方のマレー半島で戦没している。

船は自ら動かない、人が動かすのである。機帆船は家族で乗り組んでいる船が多い。人として無名の個人でも、時代の荒波は容赦なく一人ひとりを歴史の渦に巻き込んでゆく。機帆船の最後の多くは公式記録には残っていない。』

友人や家族からも感心されたり、船バカと冷やかされたり。これからも生まれ育った長崎で、歴史に埋もれた船を追って行くという。(K)